

インターンシップ・レポート

平成 31 年 4 月 4 日 提出

学籍番号	C1170981	氏名	佐々木 幾久子
実習企業・機関	公益財団法人秋田県国際交流協会		
実習期間	平成 31 年 2 月 25 日～平成 31 年 3 月 1 日		
実習指導者	三浦 明大様	指導教員	玉井 雅隆

1. 実習企業・機関の概要

秋田県知事である佐竹敬久様を代表とし、評議員会 7 名、理事会 7 名、事務局 6 名、監事 2 名で組織されている。

国際交流に関する幅広い分野の活動を促進することにより、世界各国との相互理解と友好親善を深めるとともに、地域の活力を高め、より豊かな県民生活の実現に資することを目的として設立された。

事業概要は「多文化共生社会の推進」「民間団体等の活動の活性化」「国際交流の情報や機会の提供」の 3 つが主に挙げられる。「多文化共生社会の推進」の内容として、多国籍縁民のサポートと国際理解の促進・人材育成がある。「民間団体等の活動の活性化」の内容として、民間団体の育成・支援がある。「国際交流の情報や機会の提供」の内容として、国際化情報の提供と、海外諸国との友好交流がある。

2. 実習プログラム

実習 1 日目は、秋田県国際交流協会が行っている主な仕事内容について、秋田県の国際化の現状について、「多文化共生」とは何か、AIA スタッフによる韓国と中国の文化などを紹介していただいた他、近年話題になっている「外国人技能実習生」について実態を調べ問題点は何か、またその問題点の解決方法などについて考えた。

実習 2 日目は、AIA スタッフに英語の勉強方法や、社会人になるうえで必要とされるマナーについてレクチャーしていただいたり、マレーシア出身の AIA サポーターの方にマレーシアの文化についてと日本での生活について教えて頂いた。

実習 3 日目は、JICA が行っている国際協力についてや、様々な事業やプロジェクトについて教えて頂いたり、秋田県民と在住外国人が交流する機会の企画、在住外国人による相談に対する対応訓練を実施した。

実習 4 日目は、2 日目から行っていた英訳・和訳作業をメインとして 1 日行った。英訳の内容は医療機関やそれらに関する情報についてのもので、和訳は ALT の先生方が実際に日本に来て感じたカルチャーショックについての内容だった。

実習最終日の 5 日目は、午後に行うプレゼンテーションの最終準備を行った。プレゼンテーションの内容は、①秋田県の紹介を「やさしい日本語」と英語で、②外国人からの「なぜ日本人は？」という質問に対する回答を日本語と英語で、の 2 つだった。

3. 学び・気づき

(特に実習計画書で挙げたテーマに関連づけて)

私は今回の実習のテーマとして、①情報発信力②コミュニケーション力③課題発見・解決力の3つスキルを挙げた。これらのスキルを身につけるために共通して必要なのは、多角的になることと、相互理解であるということを今回の実習を通して学んだ。

「多角的」とは物事をいろんな面から見ることで、ある一定の面からだけでは分からないことを多く知ることが出来る。「相互理解」は、自分とはちがう考えや文化を持つ人と関わるうえで、自分とは異なる点があってもそれを否定せず、相手を認め受け入れるということである。この2点の重要性を認識するために、今回の実習の最終日に日本語と英語でのプレゼンテーションを実施した。このプレゼンテーションは、英語とやさしい日本語で「秋田県の紹介」と外国人からの「なぜ日本人は」という質問に対する回答の2つがテーマだった。

やさしい日本語は、私達日本人が普段使っている日本語を外国人にも分かるように簡単にされた日本語のことである。英語でプレゼンテーションをすることはこれまでもあったが、普通の日本語ではなくやさしい日本語を使うのは初めてだったためとても難しく、今後国際化が進むにつれて英語と同じくらい必要になる言語であると強く感じ、今後の課題になるのではないかと感じた。また英語は多くの国の人が使うことができ共通言語とされているが、英語でプレゼンテーションをする際に重要となるのは、誰もが知っている英語を使うことだということを評価の際に教えて頂いた。共通言語とは言われていても、英語を理解できる人全員が理解できる英語を使うことが出来なければ、それは本当の共通言語ということとはできないと気付いた。この気づきは、私が今回の実習を通して身につけたいスキルで挙げた、情報発信力とコミュニケーション力、課題発見・解決力に重要なキーワードとなった。

また、外国人からの「なぜ日本人は」という質問の一覧を見て感じたのは、私達日本人がよく使っている挨拶や礼儀などは、日本人にとっては当たり前で深い意味などはあまり考えることはないが、外国人にとっては単なる動作を知るだけでなく挨拶や礼儀など1つ1つの動作に対して意味を理解することが重要なことなのだと感じた。例えば、「すみません」という1つの言葉にも、使い方が様々ありやはりこれは外国人にとっては使い分けるはとても難しいことである。日本人はこれを自然と使い分けているが、外国人から意味や使う場面など細かいことを聞かれると教えるのは少し難しいことだと思う。しかし、これらの動作を当たり前になす日本人だからこそ動作に込められた正しい意味を理解することは、今後外国人と関わるうえで重要になってくるのではないかと感じ、これはコミュニケーション力をより身につけるために必要となるのではないかとすることに気づいた。

4. 今後に向けた抱負

(考えさせられたこと、とまどった場面などをヒントに、実習中に解決できなかった自分自身の課題を整理する)

今回の実習を通して、本当の国際協力とは何か、異文化交流において必要なもの・大切なことは何かについて考えることが出来た。

「国際協力」と聞くと、あらゆる技術を持った日本人らが発展途上国へ足を運び、その国に合わせた支援を行うことで様々な問題を解決しようとするのだと、誰もが考える。しかし、日本人が途上国の様々な問題を解決しようとするとき考えなければいけないのが、「日本の常識

は世界の非常識」ということである。これは今回の実習中に JICA について話の中で出てきた言葉で、私にとってこの言葉はとても印象的だった。日本人にとって、家があることや家族がいること、学校へ通えること、物があること・買えることは、ほとんど当り前の事でこれは日本人にとっては心の幸せでもある。しかし、途上国へ行けばこれらの半分くらいが当り前ではなくこれらが必ずしも心の幸せとは言えないのである。このことをきちんと理解しないまま途上国へ行き一方的な思いだけで支援をしようとしても、技術的な面では支援できても他の面において何か問題が起きてしまっただけでは、それは「国際協力」ができたとは言えないと思う。「国際協力」には関わり方は様々あり、必ずしも海外へ足を運ばなければいけないわけではない。2030年までの目標とされている『SDGs』は、日本にいても出来、また誰でも出来る国際協力である。達成しようとしているゴールが 17 あり、これが 169 と細分化されたことによって誰でも関わりやすいものとなっている。このことについて私自身あまり知らなかったが今回知ったことで、国際協力には様々な方法があり、必ずしも海外へ行かなくても出来ること、また関わり方は無限にあるということを知った。国際協力にもう 1 つ必要なのは、SDGs のようなものがあるということを知ってもらうこと、途上国の現状を知ってもらうことである。これは今後国際化がさらに発展していくうえで重要となる。

また、国際化が発展していく中で異文化交流も重要となり、これには「相互理解」というキーワードが重要となる。「相互理解」は文化の違う人同士が互いの文化を尊重し、理解しあうことである。これは、確かに異文化の習慣をもつ外国人と関わるうえで重要となるが、日本人同士の関わりにも重要になってくると思う。

今回の実習を通して、国際交流の現状や問題、異文化交流に重要なことについて知ることが出来、また自分の中で「国際」というテーマについて深く考えることが出来た。今回学んだことを生かして、中期留学での学びを深めたり自分が将来やりたいことについて深く考えていきたいと思う。

(別紙 12)

大学「人材育成強化科目」ホームページ掲載用原稿記入フォーム

※以下の項目を参考の上で作成をしてください（様式は自由です）。

実習企業・機関	公益財団法人秋田県国際交流協会
実習期間	平成31年2月25日 ～ 平成31年3月1日
学生氏名	菅野将希
実習プログラム	AIA（秋田県国際交流協会）紹介 各国（韓国・中国・マレーシア・）文化紹介 外国人労働者受入制度についてデータ収集とまとめ 英語の勉強方法についてレクチャー 英訳・和訳作業 マナー講習 JICA（独立行政法人国際協力機構）の取り組み等紹介 秋田県の国際理解・交流推進のためのイベント・研修会等の企画 外国人の相談対応訓練 プレゼンテーション（秋田の紹介と外国人からの質問にそれぞれやさしい日本語と英語で）
学び・気づき (300字程度)	<p>私は5日間の実習を通して、多文化共生をしていく上で大切な2つのことを学ぶことができた。それは、“相互理解”と“多角的な捉え方”である。</p> <p>他国籍の人と交流するとき、自分とは異なる考え方や文化・習慣があるということは、ほとんどの人が想像できるだろう。重要なのは、その異なるものが何なのかの知り、理解し、受容することである。これが“相互理解”だ。そして自分とは異なるものがあるということは、自分の中での常識や認識が当てはまらないことがあるということである。つまり、物事を正面から捉えるだけでなく、あらゆる視点で側面を見ることが必要ということである。これが「多角的な捉え方」である。この2つができているとそうでないのでは、行動や発言に雲泥の差が生まれるということを感じた。</p> <p>この2つは、実習を担当して下さった方がインターンシップ初日の最初に挙げたキーワードであった。私はこのキーワードを常に意識して実習に望んでいたが、各国の文化・習慣の紹介や JICA で行っている支援事業等の説明全てが、これら2つと強く結び付いているように感じられた。</p> <p>“相互理解”と“多角的な捉え方”は国際人としてだけでなく、日本人として、企業人としてなど多くの立場において極めて重要であり、必要な考え方であるように思われる。性別や年齢によって考え方やモノの見方が異なるからだ。この2つを意識し実行することで、よりよい関係性や繋がり構築ができ、また行動や発言に説得力が生まれるのではないだろうか。</p>

<p>今後に向けた 抱負 (200字程度)</p>	<p>実習を通して、多文化共生をしていく上で大切な“相互理解”と“多角的な捉え方”を学ぶことができた。その一方で違いを知り、理解したとしても、その相手に適切な対応をすることの難しさも感じた。</p> <p>実習の中で、こどもから高齢者もしくは日本語をあまり知らない外国人でも理解できるような、「やさしい日本語」で相談対応訓練をしたり、地元の秋田県の紹介をしたりすることがあった。普段の会話で何気なく使っている言葉をどこまで噛み砕けば良いのか、わかりやすいようにするにはどこで文を区切れば良いのか等をたくさん試行錯誤した。それでも実践してみると、言葉が難しいと指摘を受けることが多くあった。この言葉は知っているだろうという前提条件のもとで文を組み立てていった結果であると自己分析している。これは言葉だけでなく文化や習慣にも同じことが言え、異性や年齢差のある人、外国人と接するとき、私たちの生活の中の文化や習慣等を前提条件としてはいけないと感じた。違いを知り、理解した上でどう対応するかが今後の自分自身にとっての課題である。</p> <p>“相互理解”や“多角的な捉え方”以外にも、インターンシップを通して学んだことや、自分自身で育んだものは、この先直面する多くの場面において必要であり、念頭に置いておくべきものであるように思われる。活かしていきたい。</p>
<p>インターンシップをして気づいた、実習先の魅力 (300字)</p>	<p>地域住民の国際理解や交流促進のためのイベントや研修会、在住外国人向けの様々なサポート事業等を通して、国際協力や意識改革を促しているように思われる。</p> <p>様々なイベントや研修会、事業を通してそれぞれの国の文化や習慣を知ってもらうことによって、想像とのギャップを埋める。これにより我々の常識を世界の常識と思わない、その国にとっての幸せとは何なのかを考えることができるようになる。つまり他者との違いを認め、受容する国際人として、多文化共生社会で生きていくための考え方の醸成をしていると捉えることができる。</p> <p>このように、通訳・翻訳サポート等の直接的なサポートだけでなく、国際フェスティバル等のイベントで楽しく文化や習慣を知ってもらい、これらを通して国際協力や意識改革を促すという間接的なサポートを行っているという点が、秋田県国際交流協会の魅力である。</p>
<p>写真 (1~3点)</p>	